



廣澤久美子氏

中村屋の相馬黒光

ただいまご紹介いただきました中村屋の廣澤です。よろしくお願いたしました。一昨日新入社員研修でこの地にまいりました。今年には新入社員が二〇人ほどでした。研修の前に東京で社史講習会を実施していきまして、創業者の人となりから創業に至るまでの経緯や、大切

相馬黒光没後七十年記念、安曇野市制施行二十周年記念

シンポジウム「相馬黒光をめぐる」

日時：二〇二五年七月二十六日

一時半～十六時

会場：碌山公園研成ホール

パネリスト

澤田裕美氏

跡見学園女子大学マネジメント学部特任准教授

廣澤久美子氏

株式会社中村屋総務・法務部長

平沢重人氏

安曇野文学館、白井吉見文学館館長

武井 敏（兼司会）

碌山美術館学芸員

にしてきたことなどをお話し、その後、実際に創業者ゆかりの地を歩かましようということで、ここ穂高にきました。通常は五月ごろなのですが、今回は碌山美術館で企画していただいている黒光展がありましたので、この時期になり、相馬家夫妻が結婚当初住んだ洋館ですとか、井口喜源治記念館、天蚕センターなど碌山美術館友の会や市役所の方をはじめとする多くの方々にご協力をいただき、この穂高を体感してもらいました。新入社員からは、知識を入れて体感すると思いが深まるという声をいただいております。

発表時間は二十分ということですので、今日私の方からは、相馬夫妻にまつわる商売の話を中心にお話させていただきますと思います。よろしくお願いたします。

黒光の生い立ち

黒光の生い立ちになります。一八七五年、明治八年九月に生まれ、昭和三十年三月二日にお亡くなりになっていきます。その前の年の昭和二十九年二月に愛蔵が亡くなっておりまして、黒光は愛蔵の一年後に亡くなったということになります。宮城県仙台市生まれであり、本名を「星りよう」と戸籍上はひらがな（旧仮名遣い）を使っています。伊達藩七〇石二人扶武士の家、父 星喜四郎と母 巳之治の三女として誕生しました。星家は母方のおじいさんの苗字です。星家のお子さんが女性しかいらっしやなかったのですが、長女の亀代（きよ）が早くに亡くなったので、次女の巳之治が多田家から養子をもたらって、「りよう」が生まれました。家系図には国木田独歩という名前が見えるんですけども「りよう」の従姉妹が国木田と結婚していました。わすか半年という期間だったようです。国木田は『武蔵野』を執筆したことで有名ですが、ジャーナリストでもありました。国木田との縁は、愛蔵との結婚にも影

響があつた方なのでご紹介をさせていただきました。良は小学校の初等科を経て高等小学校、そして宮城女学校へ進学をし、順調に進学をしてきたようにみえますが、星家というのは、伊達藩が戊辰戦争で没落士族となった時に、裕福だった家庭が貧しい暮らしとなり、学校に行けなくなった時期がありました。しかし、向学心の強い良が、もつと学校に行きたい、学びたいと言い、近くの学校ならということで宮城女学校へ進学をすることになりました。高等小学校時代には、押川方義が設立した仙台教会でキリスト教の洗礼を受けていまして、この時、兄のように慕っていた神学生の島貫兵太夫という方からアンビシヤスガールというニックネームをもらいました。これで人となり分かると思いますが、活発で「じゃじゃ馬」とも言われ、野心的な方だったそうです。そして

宮城女学校を中途退学し、横浜にありますフェリス和英女学校に移ります。その後、キリスト教に疑問を感じて文学の世界にということとで、文学にすごく強い学校だった明治女学校に転校します。最終的に行きかけた学校、憧れていた学校に転校したということになります。そして、明治女学校で多くの著名人と交流を持ちます。なかでも巖本善治という明治女学校の校長は、のちに「黒光」とい

相馬黒光

- ・小学校初等科、高等小学校を経て、宮城女学校へ進学
- ・高等小学校時代（13歳）、押川方義が設立した「仙台教会」でキリスト教の洗礼を受けるこの頃、神学生だった島貫兵太夫から「アンビシヤスガール」というニックネームをもらう



結婚

うペンネームを付けた人です。結婚後の明治三十三年に『女学雑誌』に寄稿した際にそのペンネームを貰いました。そのほか有名な方がいらつしゃいますが今日は時間の都合により割愛して先に進めたいと思います。

愛蔵と良の共通はキリスト教でした。先ほども登場した仙台教会の神学生、島貫兵太夫から「こんなじゃじゃ馬は、あの心の広い愛蔵さんぐらいしか嫁の貰い手はない」ということで愛蔵を勧められ、結婚に至ります。良は国木田との交流がありましたので、田園の世界に憧れをもっていました。愛蔵と結婚すれば、穂高という田園の世界に行けると思ったのが結婚を決めた理由の一つでした。嫁入りの際、星家は没落士族となった影響で嫁入り道具の三種の神器を持つていくことができず、オルガン、《亀戸風景》、勝海舟の書という、頂き物をもっていきました。現在、オルガンは井口喜源治記念館にございますし、《亀戸風景》は今碌山美術館で展示していただいておりますが、相馬御本家にあります。残念ながら勝海舟の書の行方はわかりません。

中村屋創業

相馬家に嫁いだ後、なかなか旧家の暮らしに馴染めず病んでしまいました。良は宮城の都会暮らしでしたから、心配した愛蔵は上京することにします。

一歩、穂高から出ると、不思議なくらい黒光の体調は良くなり、ここで生計を立てようということになります。しかし、人に使われるのが嫌だという性格の愛蔵は自ら何かできるものということで商売を志しました。ただ、愛蔵は農家の出ですし、良も商売を経験したことがなく、つまり二人とも商売には素人なのです。ですから玄人の中に入るのではな

く、まだ馴染のない商売、定着していない商売に目を向けます。それがパン屋だったのです。この頃はご飯の支度といえは煮炊きをしていた時代です。

相馬夫妻は約三か月間、近くのパン屋で一日二食、パンにして自分で試してみました。そして、パンだったら急な来客でも対応できるように食べられる便利な食べ物ということで将来性を確信します。そしてパン屋を始めようとしますが、自分たちはパンを作る技術はないのでパン屋を居抜きで購入し、今でいう「オーナー」になろうと考えたのです。そこで、「万朝報」という、当時よく読まれていた新聞に「食パン 製造および道具一切譲り受けし、本郷千駄木林町一八 相馬」という広告を出します。つまり、パン屋を始めるのに自ら研究し、素人でもできる方法を考え、実行したのです。すると申し出のあったのが「中村屋」というパン屋でした。このお店は人気のあるパン屋で相馬夫妻が毎日二食をパンにして試していたときに購入していたパン屋だったので、当然、味も知っていました。ですから店名を変えてお客様が離れないようにと「中村屋」という店名をそのままに創業しました。それが明治三十四年十二月三十日でした。

中村屋の相馬黒光 ～商売～

・売り出された「中村屋パン」を居抜きで購入
→ 1901 (明治34) 年12月30日創業



こちらは創業当時の愛蔵・黒光と従業員の写真です。こちらが愛蔵、こちらが黒光、女中や小僧もいらつしゃいます。こちらは後に二代目の社長になる長男 安雄です。安雄の上に俊という女の子がいますがこの写真には写っていません。実は穂高を出るとき、相馬家の跡取り問題とこの写真がありまして、長兄に上京を反対されます。お子さんがいなくて年の離れた長兄夫妻に育てられた三男の愛蔵は、次男が家を出ていたので跡取りになるよう言われていました。最終的には、養蚕が忙しいときは穂高に戻ってくださること、長女の俊を穂高に置いていくことを条件に許しを得ます。長男の安雄は乳飲み子でしたので、愛蔵・黒光とともに三人で上京したのです。

さて商売の話に戻りますと、愛蔵も黒光も商売には素人でしたし、オーナーになると言っても、みんな同じように働きます。黒光は「いらつしゃいませ」のひとつを言うのも恥ずかしくて顔が赤くなってしまっただけでした。千駄木の家からお店まで行く間に広場がありまして、そこで毎日店に行く前に「いらつしゃいませ」「ありがとうございました」と言う練習をしてからお店に立つという努力をしていた、そんな真面目な方でした。

創業して三年後の明治三十七年、クリームパンを創案しました。新商品を作ろうと思っていたところ、ある日シユークリームを食べたらとても美味しかったので、このクリームをパンの中に入れてはどうだろうということでした。この時の時代背景といえは、日清戦争や日露戦争があり、「滋養」とか「栄養」が時代のキーワードとなり、富国強兵などと言われていた時代です。そうすると、卵や牛乳を使うクリームがパンの中に入っていますから、栄養価も高いし、おいしいということで時代に受け入れられてヒット商品になりました。

「新宿中村屋」誕生

その後、養蚕の忙しい時期になると、愛蔵は穂高に帰ってしまいましたから、実際に店を切り盛りしていたのは黒光でした。ある日、愛蔵の留守の際、税務署に売り上げを申告しなければならず、黒光は正直に売り上げを申告しました。当時の税務署は売り上げに対して重税をかけるので、商人は売り上げを低く見積もって申告していたそうです。そんな時代です。でも黒光は、正直で真面目な方でしたから、正直に申告したのです。そのときのことを「私はどうしてもその売り上げを下げた申告するっていうことができなかつたので、正直に言っていました。ただやっぱり重税がかけられてしまったので、その分、その相当な税金を納めねばならなくなりました」と書いています。税金を払うという、ピンチを脱するために支店を設けて売り上げを伸ばそうと考えます。つまり創業した場所は東大の正門前で、お客様は学生が先生が多く、お客様の層が広がらないので他の地に支店を出そうということです。それが新宿でした。新宿では、本郷で作ったものを販売する「売店」を出します。すると一日の売り上げが本郷の店より良かったので、ここで商売をしようということになりました。製造場も設けて、中村屋が新宿に移転し、本店としました。これが「新宿中村屋」の始まりで明治四十二年のことになります。ここに看板がありますが不折が揮毫した「中村屋」の文字です。ここに箱車があります。ここは、今フルーツの高野さんですが、この頃、高野さんはずっと新宿駅寄りにいらつしやいまして、雑貨屋さんでした。こちらは人力車屋ですが、後に買い取り、インドカリーを提供する喫茶部となります。ざっと年表でまとめてありますが、中村屋は東京・本郷で創業し、新宿へ移転と同時に日本菓子の製造・販売を始めています。日本菓子とは、いわゆる和菓子のことですね。大正時代になると洋菓子を製造・販売し、時代とともに業容を広げていきます。大正時代

には改組し、商号を「株式会社中村屋」にします。よく「株式会社中村屋」と「新宿中村屋」はどちらが正しいのですかと聞かれますが、「新宿中村屋」は屋号です。どちらが正しいのかと聞かれるとどちらも正しいですね。

喫茶部開設と代表三商品の発売

昭和二年に喫茶部、つまりレストランを開設することになりますが、きっかけは関東大震災でした。新宿はそんなに被害を受けていませんでしたが、このあと百貨店が出店するなど、新宿の街が変わっていきます。すると中村屋も打撃を受け、売り上げが下がりました。そこで新商品を作ろうか、営業時間を延ばすなどの対策をします。新宿には人が集まり、どこかで一休みできる場所が欲しいと、お客様からご要望をいただきました。それで喫茶部、つまりレストランを始めたのです。喫茶部の開設と同時に発売したのが中村屋の純印度式カリーで、ラス・ビハリ・ボースのお話しになります。ボースは中村屋で喫茶部を出すのなら、本場のインドのカリーを日本人に食べてもらいたいとメニューに提案したのです。それを受けて、レストランは後発だったので、黒光は他のお店とは違う異国の料理を提供するお店にしようと考えたのです。

こちらは昭和二年六月十二日喫茶部開設当日の記念写真です。中村屋では、六月十二日は「恋と革命のインドカリーの日」と制定し、日本記念日協会に登録しています。こちらは昭和八年にできたインド間で、もちろんカリーも提供していました。カリーの写真をご覧くださいますと、コーヒートカフルーツとか付いています。こちらのカリーが入っているポットは陶器です。黒光が発注して、作らせたのです。黒光は開発部長の役割を担っており、カリーの提供の仕方や、お店の内装、セットの組み方など全部コーディネートをしていました。

昭和二年に発売したカレーは、実はあまり売れなかったのです。ボースのカレーは辛かったらしく、日本人からすると辛い肉じゃががご飯にかかっていたような感じだったようです。ボースは味は見えていたようですが、結局作ったりしていたのは相馬家の方たちで、黒光や次女の千香たちと家族で切り盛りをしていました。発売当初は素材を厳選し、インドからスパイスやお米を輸入して使っていました。しかしインドのお米は日本人の口に合わず、お米を変えてみたり、鶏肉も新鮮なものが手に入りにくかったので自営の養鶏場で作ったりと、日本人の口に合うように工夫していくことで、発売当初は二〇食ぐらいしか売れなかったのが昭和八年ごろには三五〇食ほど売れ、大盛況になったということなのです。インドカレーについては、わりとボースのことが前面に出ますけど、実は黒光も結構携わっていたということですね。そしてカレーの発売と同じ年に、今でいう「中華まん」と「月餅」も発売しています。これは創業者夫妻が、今でいう中国に旅行に行った際に出合ったものです。中華まんや月餅も中国人向けの味付けだったり油っぽかったりしたので、日本人の口に合うようにアレンジして提供しました。この当時、黒光が言っていたのが、「中村屋は思いつきで発売

中村屋の相馬黒光 ～商売～



【1927（昭和2）年6月12日 喫茶部開設時の記念写真】

【昭和初期 インド間】



【フルーツとコーヒーがセットされた「純印度式カレー」1円】

したような商品は一種も無い。店に並べても、もし中止するようならばそれは戦に敗れて兵を引くことと同じ恥辱である。あらゆる面から研究し、準備することが必要である」と。本当に、お客様に喜んでいただく美味しい商品を提供するためにはどうしたらいいのか、ということの研究してちゃんと美味しい商品を出していこうつていうことを常に考えていたというような方だったと思います。また、従業員が失敗したかけひもや包装紙をとってにおいて、どれだけロスが出ているのかを認識してもらおうなど資材を無駄にしないように躡ける厳しい一面もあったようです。

昭和二十年五月の東京大空襲によりまして、中村屋は焼失します。戦後復興したのは三年後の昭和二十三年でした。愛蔵はもう復興は無理だと、諦めかけていましたが、黒光はなんとかまた美味しいものを中村屋で提供したいと、復興させたかったのです。ただ、二人とも晩年でしたので、黒光と同じように復興させたいと思っていた長男の安雄はもちろんのこと相馬家が一丸となり、疎開先から職人を呼び戻したりしてみんなで復興させたのです。

中村屋の相馬黒光 ～商売～

1927年 喫茶部開設、「純印度式カレー」と同時に「天下第一支那饅頭」「月餅」も発売



【左：肉入り 1コ6銭
右：餡入り 1コ4銭】



【大型 1コ50銭
小型 1コ25銭】

芸術・人道支援

黒光といえば芸術に造詣が深かったことで知られていますが、中村屋サロンの話につきましましては、後の武井さんに譲るとして、中村屋での活動についてお話しします。中村屋では大正時代に秋田雨雀の脚本を読み合う「脚本朗読会」を開催していました。やがて読みあうだけでは物足りなくなり「土の会」と称して演劇を始めます。新宿にお店を構えてから初めて麴町に家を持つのですが、その自宅に土蔵があり「土蔵劇場」として演劇をしていたということです。残念なことに数カ月後に関東大震災が起きて、土蔵は潰れてしまい、復活しなかったそうです。

もうひとつ。人道支援についてお話しします。黒光と愛蔵は、困っている人を助けるということや、人との関わりで商品が生まれというエピソードがあります。例えば、

ラス・ビハリ・ボースはインドカリーですとか、ワシリー・エロシエンコはボルシチやピロシキがあります。関東大震災発生時には、いち早く今ある原料で商品を作り、原価に近い価格で被災者に提供する。それから千一運動といつて、従業員の希望者からお給料の千分の一を毎月募り、昭和三十年に老人ホームの設立をしました。黒光は、戦後これからは一人暮らしの老人が

中村屋の相馬黒光 ～芸術～

- ・中村屋サロン（碌山、中村彝、會津八一）
- ・脚本朗読会
- ・「土の会」と「土蔵劇場」



【秋田雨雀、神近市子、相馬黒光】



【1928（大正9）年頃 脚本朗読会】

多くなるだろうということから、東京の杉並区に浴風園という養護老人ホームの敷地内に、黒光園という有料の老人ホームを設立したのです。黒光は残念ながら設計後、この世を去ってしまったので完成をみることはできませんでしたが、トイレは絶対に綺麗にしてください、とお願いをしていたそうです。トイレが汚いのは一番嫌なことです。カリーの時もそうですけど、どうしたら美味しくなるか、どうしたら美しく見えるかなど、物事の本質を見抜いていく人だったと思います。そして現状に満足せず、従業員も商品も磨き上げていく、それが今の中村屋にDNAとして受け継がれています。

中村屋の創業者 相馬愛蔵・黒光夫妻

私達は創業者を相馬愛蔵・黒光夫妻です、と

言っています。創業者という一人だったり、共同経営というのもありますけど、中村屋の場合は創業のときから黒光が中心になって店を切り盛りしていましたので、中村屋の創業者は相馬夫妻なのです。それも中村屋のマークに表れています。左側に相馬家、右側に星家、両方で相馬夫妻を表しています。右下が西洋でお金を数えるときに使う盤のよう

中村屋の相馬黒光 ～まとめ～



【創業者 相馬愛蔵・黒光夫妻】



【中村屋のマーク】



萩原守衛 《女》1910年

中村屋という場から日本の美術史上に燦然と輝く作品が三つも生まれていることになりました。ちなみにカフカス人とはコーカサス人のことです。ロシア革命の動乱で日本に流れてきた人た



武井 敏

相馬黒光と萩原守衛

なもので日本でいう算盤のイメージですが、「商売」を表しております。左下が天秤で、片方が中村屋、片方がお客様ということで、ひとことと言うと「中村屋の商売は正確正直なり」という意味になります。私からは以上となります。ご清聴ありがとうございました。

続きまして、私からは「相馬黒光と萩原守衛」というタイトルですが、萩原の代表作《女》を中心に話させていただきます。よろしくお願いたします。

今ご覧いただいているこの作品《女》は一九一〇年に制作されたものですが、石膏原型が重要文化財に指定されています。この作品だけでなく、先ほど廣澤さんが少しふれた中村屋サロンには、日本美術を彩る作品がいくつもございます。それが、中原悌二郎の《若きカフカス人》、中村彝の《エロシエンコ氏の像》です。中原の《若きカフカス人》は大正彫刻の白眉として名高い作品ですし、《エロシエンコ氏の像》は重要

文化財の指定を受けています。

中村屋という場から日本の美術史上に燦然と輝く作品が三つも生まれていることになりました。ちなみにカフカス人とはコーカサス人のことです。ロシア革命の動乱で日本に流れてきた人たちがずいぶんいました。そのなかで中村屋に逗留してご厄介になったのが、《若きカフカス人》のモデルであったニンツアや《エロシエンコ氏の像》のエロシエンコだったわけです。

中村屋サロン

中村屋サロンについて少しお話ししますと、大きく言うと、美術という領域からお芝居あるいはちょっと政治的な領域に変異していった場です。まず碌山を中心にその友達たちが集まってきました。なかでも柳敬助という画家は中村屋の敷地にアトリエを構えます。このアトリエは萩原が監督したものです。萩原が亡くなるとその遺作をおさめた碌山館というものを柳のアトリエの向かい側につくりまして、美術好きな者たちが集まる場所になりました。当時はまだ作品を展示する場所はほとんどなかったんです。柳がアトリエを出るとつづいて中村彝が入ります。中村がアトリエを出ると、インド独立運動の闘士ボースの隠れ家に使われました。ボースは当時イギリスから指名手配されていて、身を潜めなければならなかったのです。そしてまたエロシエンコが厄介になったりと、主が変わっていきました。

こちらは当時の見取り図ですけれども、この下の方が旧甲州街道、ここにボースの隠れ家、碌山館とありますね。このボースの隠れ家だったところが、最初柳敬助のアトリエだったところなんです。そこに、相馬家の家族が遊びに来た写真があったりですとか、柳のアトリエに碌山の作品が置かれていたような写真も残っています。そういうわけで萩原が中村屋サロンの基礎となったと言えると思います。この見取図の場所に今も変わらず中村屋さんがあるのですが、先ほどお話しがありましたように、中村屋さんは最初本郷で開業し、新宿に支店を出し、それがやがて本店になって行きました。支店はまず十一番地で開店しました。これは一九

○七年十二月のことです。これから二年ほど後の一九〇九年春に現在地（十二番地）の売却の話を紹介され八月に移転するわけです。

碌山のアトリエ

それでは碌山のアトリエがどこにあったかというところと新宿駅の向こう側、当時は淀橋浄水場がありまして、その畔です。中村屋からだいたい六〇メートルほどのところ。歩きで行き来のできる近所です。高村光太郎がアトリエに泊まりに来た時は中村屋から布団を借りて歩いて持ってきたなんていうエピソードも残っています。

このような近所でもあったことも手伝って、穂高時代からの旧交をこの新宿の地で温めていたわけです。碌山は中村屋に足繁く通うというよりも入り浸っていたと言った方がよいくらいで、新聞で「パン屋の美術家」と揶揄されたこともありましたが、中村屋さんに行けば碌山がいるということ、取材に来た記者が「萩原君は毎日のやうに中村屋へ入浸つては暢気な事を云つてゐる。（略）知らぬパン屋の二階で図らず二人の芸術家に出会ひたる記者は」云々と、中村屋の二階で二人の芸術家（萩原と戸張孤雁）に出会ったことを記してもいます。こんなところからも萩原の入り浸り具合が察せられるわけです。

ちなみに碌山のアトリエができたのは一九〇八年の六月ですが、その直後に碌山が友人の富岡利加子に宛てた封書では碌山の住所は「新宿淀橋十一」となっています。つまり、自分のアトリエの住所ではなくて、中村屋さんの住所を記しているわけです。その後一九〇九年五月三十日付で、アメリカ人の友人ウォルター・パッチに宛てた葉書には「86 Tunohazu Yodohashi / This my new address」と記し、淀橋角筈八十六番地が僕の新しい住所だと告げています。ですから、中村屋さんが支店を十一番地から十二番地へ移す頃のタイミングで、アメリカ人の友達

に向けて転居先を告げているわけです。このタイミングでこういうことを言うってこと自体が、日本に帰ってきたからよほど中村屋さんに入り浸っていたんだらうなことが察せられるように思います。

中村屋が一九〇七年十二月十三日に十一番地に支店を構え、一九〇九年春に十二番地の話があり、八月に移転。この支店設置と移転の間の、一九〇八年三月に碌山は帰国、六月にアトリエを新宿に構えるという時系列から考えると、碌山はアトリエができるまでの仮の住所として相馬家の住所を借りていたようですし、それは中村屋の支店の移転頃まで続いていたようにみえます。アトリエの完成までのあいだは相馬家に寝泊りすることもあったかもしれません。

碌山作品のモチーフ

碌山は享年三十という短命でありましたし、彫刻家としてのキャリアも短く三年ほどしかなかったため、多くの作品を制作することができませんでした。加えて滞仏期の彫刻は石膏に取ることもほとんどなく、さらに日本で制作したもので失われた作品が数点ありますので、現在わずかに十五点しか残っておりません。そのうち、例えば《戸張孤雁像》は親友の戸張孤雁がモチーフ、《北條虎吉像》は北條寅吉、《宮内氏像》は宮内良助、《銀盤》は柳敬助、《小児の首》はアトリエの近くに住んでいた大工の息子、《爺》は新宿に花を売りに来ていたおじいさん、そして《女》は黒光がモチーフです。ここから比較的身近な存在がモチーフになっていることがわかります。

絵画作品に眼を転じれば、柳敬助をモチーフにした《柳肖像》という油彩画がありますが、なんといっても黒光をモチーフにした作品が一番多く、スケッチでは《こたつ十題其の一》《こたつ十題其二》、さらに消失してしまった油絵とデッサンには《母と子》という作品がありました。



萩原守衛 《こたつ十題其一》

きな位置を占める存在だったことは間違いないでしょう。

黒光への想いというものは、新宿時代に始まったのではなく、今回の企画展で久々に展示している、在郷時代、一八九九年の日記、通称「つくまのなべ」のなかに「ア、才智ある婦女子との会話は実に喜ばしきものなり」（五月三十日）と、黒光と話すのが楽しくてしようがないなんていう記述もあって、若い頃からあったものだったのです。まだご覧いただいていない方は是非ご覧ください。

《女》

ではこれから《女》の話に移っていききたいと思います。

これまでどんな解釈があったかと言いますと、例えば、黒光は「女性の悩みを象徴してをりました」と言ってますし、中村伝三郎先生は「一縷の願望をこめ天の一角を見つめて封建的屈従からのび上がる」とする明治女性の普遍的象徴、「仁科惇先生は「身もだえながらも未知の高みを振り仰ぐ苦悩と意志の形」と解釈しております。そういうわけで苦悩と希望、相反するものが同居しているとこれまで解釈されてきました。それは《女》が苦しいポーズを取りながら、苦しんでいないような表情をしているということから導き出された解釈なのです。

それでは、モデルは一体誰だったか。これについては写真を頼りに見

こうやって相馬黒光をモチーフにした作品がたくさんあることから、碌山が黒光のことをすごく好きだったかどうかというのとはわからないにしても、少なくとも嫌いな存在ではなく、とても気になる存在、心の中で大

ていきたいと思えます。《女》の制作にあたり碌山は岡田みどりというモデルを使っていました。それでも、この作品と《デスベア》の制作中に黒光の子供たちが「一見カーサンだと絶叫」したことを黒光が伝えていますし、黒光自身が「私自身だと直覚されるものがありました」とも言っています。碌山の親友の高村光太郎は「顔面に或る女性のイメージ



《女》



岡田みどり



相馬黒光

がはつきりと出てゐて、それを知る者の心をつよくうつ」と言っていますし、当館の創立に尽力した彫刻家の笹村草家人は「八十に近い年寄りになっても黒光の顔や骨格の感じが「そっくりだ」と思われた」と言っています。つまりモデルは岡田みどりだったのに、似ているのは相馬黒光だとみんな言っているわけです。

ではどのくらいそっくりなのかということとを写真で比較してみたいと思いますが、こちらが《女》の横顔です。実際にモデルを務めた岡田みどりの顔はこちら、その横が黒光の横顔です。いかがでしょうか。この三者を比較してみると、額の丸み、小鼻の形からして、《女》の顔はモデルを務めた岡田より黒光によく似ていると言えるのではないのでしょうか。そんなわけで《女》は黒光と密接に関わる作品と言えるのです。

黒光の人生

では黒光はどういう生涯を送った人物だったのかということとをちょっ

と見ていきたいと思えます。これについては先ほど廣澤さんが詳しくご紹介してくださいました。ちなみに黒光というペンネームは、黒光の明治女学校時代の恩師である巖本善治が、あなたは才能がきらめき過ぎているからそれは慎んだ方がいいよ、きらめく才能を隠しなさいという戒めの意味を添えて与えられたペンネームです。

黒光の人生については本日略年譜をお配りしたので、それをご覧いただくとして、そこには記していませんが、仙台、東京、そして穂高、そしてまた東京に戻った時代、つまり黒光の前半生を記したこちらをご覧いただくと、前半生は悲運、貧しさというものに彩られたものだったことがわかります。仙台時代では貧乏になっていってしまうし、親兄弟が病気で亡くなってしまうたり、学校には行きたいけど貧しさのため入学させてもらえない時もありました。で、穂高に嫁いできてもなかなか馴染めないというような煩悶が続きました。中村屋さんは今では知らない人がいないような大きな企業ですし、戦前の昭和十年代には大変な売り上げをあげられるお店に成長しましたが、碌山が《女》を作った頃はまだそれほどでもありませんでした。制作当時の文脈で言えば、黒光は悲運や貧しさを乗り越えてきた、あるいは乗り越え続けている女性として、碌山の眼に映ったと思われれます。

また《女》については次のような視点を持つことができます。この文章は碌山の友人である小山鼎浦が《女》制作中に発表したもので、そこには「絶望」と此近業（《女》のことです）とを併せ見れば、小説を読むに優りて、僕は教養ある現代女性の内部生活を洞見し得るを感ず」とあります。《女》と《デスベア》の二作品をセットで見ると、一九一〇年当時の女性の内面が見えてくると言っています。碌山の友人が、この二つはセットとして見ることでできると言っているわけですから、これはひょっとしたら碌山が友人にそのように説明したのかもしれないと考

えられます。当館では碌山館のなかほどに《デスベア》と《女》が前後して展示されています。ちょうど《デスベア》越しに《女》を見ることのできるようになっていきます。文字ベースでの記録はないのですが、伝え聞くとところによると、朝の連続テレビ小説の最初の「水色の時」が撮影されている時、監督さんが主人公の大竹しのぶさんに、この二つを見ろよって言って、絶望した女は立ち上がったぞ、という説明をしたとかしないとかってということが伝わっていますし、そういう意味では、二つの作品の関係性を踏まえた展示になっていると思っっています。

それでは当時の女性はどうだったのかってところに関して言えば、当時は「新しい女」という言葉が流行った時代でした。そしてその一人に目されたのが相馬黒光でした。「新しい女」とは、それまでの旧習のなかでなかなか社会進出できないもどかしさを抱えながら、それでも少しずつ新しい職業領域に出て行った女性たちを評した言葉です。そういう新しい女性たちについて、自身も新しい女として、『青鞥』を平塚らいてふから受け継いだ伊藤野枝は「先導者としての新らしき女の道は畢竟苦しき努力の連続に他ならないのではあるまいか」と記しています。《女》は、こうした新しい女をモチーフにしたというようなことでもできる作品でもあります。

そしてさらにですけども、多くの皆さんのイメージにあるように、碌山の当時抱えていた相馬黒光への想いの現われとも解釈されているわけです。実際黒光への想いはどんなものであったかと言えば、先ほどお話ししたように、間違いない嫌いではなかったでしょうし、黒光をモチーフにした作品が多いことから、碌山の心に占める割合が大きな存在であったことは少なくとも言えると思います。碌山の想いのほどに関しては、相馬黒光は「性の違ふ者の同志ですからそこに生じた愛情に互に苦しむやうになりました」と言っていますし、高村光太郎に言わせる

「或る人妻に対する彼の一方的恋愛、若しくは理知を伴った相愛」というような状態だったようですし、パリ時代からの友人には「中村屋へ時々よつてゐる内にその相手の婦人が誰であるか判つた」と思われていたようです。ですから、周りの人たちからすると、黒光にすぐく想いを寄せていたと見ることもできます。碌山自身の心中はどうだったかについては、これは残念ながら資料がなくて、黒光を大好きとか愛しているんだってという資料は残っていませんので、よくわかりません。ただパリにいた高村光太郎に「冷たい運命の手に捕はれて寸分も身動きのならぬ様になつてしまつた」という手紙を送っていたようですし、黒光に「俺はとても堪へられない」「俺はその内参いっちゃう」と心情を吐露したことが伝わっています。こんなことから碌山は非常に苦しんでいたことがわかります。そして碌山の言葉「Struggle is beauty」からそうした苦しみを乗り越えていこうとしていたポジティブな心の内を察することもできます。

まとめてみますと、『女』という作品は、苦しみを乗り越えてきた女性としての相馬黒光がモチーフになっていることができるでしょうし、同時代的の新しい女の表象ということもできるでしょうし、そしてこちらが、よく語られることですけども、碌山自身の精神的な自画像としても解釈されています。ですから重層的な意味を持つ、奥行きのある作品だと言えることができます。

ちょっとこれは補足というか余計なことかもしれませんが、当館の『女』は、昭和二十九年十二月に相馬黒光のご厚志で鑄造されたブロンズ像です。そしてこの鑄造の三カ月後の昭和三十年三月に黒光はこの世を去っていきます。つまり、亡くなる直前に、自身がモチーフとなった作品を、あるいは自分の現身をこの世に残して旅立っていったとすれば、なんともロマンティックな話ではないだろうかと思ひ、私の発表を終わ

らせていただきます。ありがとうございました。

小説『安曇野』で異彩を添えるご婦人 相馬良



平沢重人氏

はい、よろしくお願ひします。安曇野文書館と白井吉見文学館で仕事をさせてもらっている平沢重人といいます。自分がここにいる意味のいうことで、小説『安曇野』から見ると、ということ、話をさせていただきます。

『安曇野』の第一部の巻末に作者敬白つていう部分があるので、一回読んでいただければいいかなつていうふうに思います。どんなふう書いてあるかというと、『安曇野』に登場する主要人物は、木下尚江を中心に、中村屋夫妻、荻原守衛、研成義塾の井口喜源治の五人である。全体としては、四部もしくは五部を予定しているが、本巻は、その第一部に相当する。これは、言ってみれば、「青砥稿花紅錦画」で稲瀬川に勢ぞろいした白浪五人男のツラネが終わったところと考えてもらえばよい。さいわい、わが『安曇野』では、婦人ひとりだけがまじつて、異彩を添えてくれている。つていうふうにかかれていきます。白井吉見は、相馬良・黒光のことを、異彩を添えているとこの『安曇野』で、表現していることを、ここで告白をしているんですね。白井が語つた黒光、異彩の夫人っていうのはどういう姿なのかつていうことで、その部分をちょっとピックアップして、皆さんに紹介したいと思います。

今五人の主要人物つていう話をしましたけれども、その主要人物の登場数でありますけれども、上から順番にこうあります。第一部、第二部、第三部それぞれあつて、合計、相馬良が八三九回ということ、一番多

いんですね。なので、今回良の話を皆さんにしていくわけですから、小説の中で一番注目されている人物であるということが分かる。うふうに思います。で、各巻の中でも良が上位を占めている部分も多いので、小説の中で、とても重要な人物である、そんなご婦人であるというところがこれでも分かります。で、どうしてこんな数字をここで私が紹介できるかというと、ここに、「白井吉見の『安曇野』の第一部から第五部、登場人物一覧表」という冊子を作った方がおられますけれども、この冊子の存在知っている人、挙手していただけてあげてもらっていいですか？ はい。少ないんですけども、この冊子に全ての登場人物がどこに、何ページに載っているかというのには全て記されているので、自分がこの人物について少し調べたいとか、そういうのがあります。白井吉見文学館と文書館には、これを頂いてありますので、お見せします。ちょっとお貸しすることはできないんですけども、おいで頂ければというふうに思います。

最初に登場する人物ですが、三ページ目に良が出てくる。これは第一部のその一、白井吉見の生原稿です。昭和三十九年に、第一部がこう出ているわけですが、それより以前に白井は書いていたわけですから、本当に年が経ち、いろんなところで展示もされているので、本当にちょっと、可哀そうな状態ではあるんですけども、これが残っているというところがすごいなというふうに思います。赤い丸を付けましたが、赤い丸のところは、良という字がこう見えますね。「良の朝からはじめたクリスマスストリーの飾りつけができあがりかけていた。去年とちがって、五月生れた俊子がいはいえ、おかしなほど手間取ってしまった」。この部分が、小説『安曇野』で、良が最初に登場する部分であります。生原稿を見たら、明治三十一年十二月二十八日という最初白井は書いて、それを消して、水車のところから実際

の小説は始まっているんです。どうして、十二月二十八日にクリスマスストリーの飾り付けをしているのか、っていうところは、ここで話してしまおうと今回の良の話とずれてしまうので、話しませんけれども、興味のある方は、また調べていただければ嬉しいかなというふうに思います。

それでは、良が新しい女って言って、武井さんがお話をしてくれましたが、その部分が第一部のその一に白井自身が書かれています。何て書いたかというところ、「俊子という名前は、中島湘煙の本名から思いついたのであった。妊娠と知ったとき、女の子にちがいないという予感があった。そのときからこの名前を考えていたのだ。(中略) 俊子ときめることに、なんのためらいもなかった。新興日本にふさわしい女性の先覚者といえば、中島湘煙のほかにはない。いつのまにか、良はそう思い込んでいた。宮城女学校時代、女学雑誌で読んだ彼女の文章に、身のふるえるほどの感銘を覚えたことがあった。それは「日本社会の空気」と題されていた。良は、その一部を今なお暗唱することができた。それは女性に自由をゆるさない、せまくゆがんだ日本社会に対する精いっぱい抗議であった」とあります。要は、その思いで、長女に俊子という名前をぶつけたというところが、白井吉見は、小説『安曇野』のしよっぱなにも書かれていますね。だから、これが、白井吉見が、その後ずっと、良を、表現する一貫したものになっているというふうに思います。これが、異彩を添えるご婦人、っていうことになります。

一つだけ萩原守衛と黒光のことについて触れたいと思います。第一部のその四に、守衛が東京に行くために家出をする場面が書いてあるんです。そこに何て書いてあるかというと、「安兵衛が守衛の家出事件について話し出したとき、わたしが煽りたてたみたいなのですよ、と良の言いきったのは、先手を打とうというのではなかった。守衛の家出には、自分たち夫婦が多かれ少なかれ、責任のあることは、良自身否定

しないわけにはいかなかった」。なので、この時から、良は、守衛の生き方というか、守衛の人生にずかずか自分が入っているっていうことを、自分で語っています。それは臼井吉見の言葉で、語ってるんですけども、ただそういうことですね。家出を起こした原因の一つに、私があるんだよっていうことを言っている部分ですね。

愛蔵と良には、子供さんが九人います。亡くなられてしまった方達が複数人いるわけですけども、今日皆さん方にお話するのは、俊子さんと虎雄さん、その二人を取り上げて、家庭人としての相馬良について話をしていきたいというふうに思います。

第三部その六。俊子と中村葬との関係について書かれています。「黒光の目をかすめて、俊子はしばしば屋根づたいに葬のアトリエと往来した。そんなあいびきから帰っても、口では何も語らなかったが、彼女の頬は紅潮し、眼はいきいきとした光を増したかに思われるのだった。離婚して実家へ戻り、その実家にもおちつけないまま、東京へとび出してきた信子にとって、そういう俊子の姿はいじらしくて、心のあたたまるものがあった。無論それは葬への尊敬も手伝っていたことはいまでもない」と。信子さんっていうのは、先ほど廣澤さんが、従姉妹で、国木田独歩さんとの話をしましたが、その人が信子さんなんです。信子さんが俊子に話をしているそんな場面ですね。

その六の続きです。けれども、葬が、葬は俊子に思いを寄せているんですけども、その葬が良に、語る場面ですね。「これチャアたまげた。いまんころになって、母親風を吹かせるのは滑稽だね。(略) あんたというひとは自分のことで頭がいっぱいなんだ。ひとのことを考えないわけじゃなく、大いに考えもするだろうが、結局は自分がチャホヤされたためさ。」しかし、ボースと俊子は結婚をその後するわけですけども、その一二にこうあります。「ボースをかこむ事態がこうなつては、

安心してまかせることができる連絡係の役割は俊子のほかにはなかった。良からそのことを切り出されたとき、俊子の気持には強く反撥するものがあつた。葬との仲を強引に堰こうとして躍起になっている、母親の思いやりなさに対する抑え難い不満に加えて、ボースの連絡に当ることは、国家のためでもあるというふうな口吻が同じ母の口からしきりにもれたからでもあつた」と、良、三人の間の語りが綴られています。

第四部になります。虎雄さんです。母親と不仲っていうふうに書かせてもらいましたが、虎雄さんです。一番最後に生まれた末っ子の男の子になるので、可愛いはずなんだと思うんですけども、虎雄は良にどういうふうなその場面で語っているかというと、「あんな石塔をいくつ、どこへ建てたつて、罪亡ぼしにはならないよ、黒光なんて呼ばれていい気持ちになつていられるばかりか、うちの商品に黒光羊羹だの、黒光饅頭だのつて、柄にもない雅号なんぞくつつけて平気であるうちは駄目さ、僕アおふくろがほしいなア！ 黒光なつてまっぴらだ、姉さんだつてそうだろうー」虎雄はそんな思いをぶちまけて、陸子の同感を求めたのも、そのときだった。

虎雄にしろ陸子にしろ、おふくろという言葉で思い浮ぶのは、多摩川べりの農家の里親のことであつた。ブラジルで死んだ文雄にしても、その点ではおそらく変りはなかつた。これは、吉見が言っていることですからね。あくまでも臼井吉見が書かれている黒光像であります。

小説からちよつと離れると、武井さんが紹介してくれた年譜に載っていました。宇佐美さんっていう朝日新聞の記者であつて、その後本も書かれていられる方が、相馬黒光について、書いていられるんです。そのところに、「わたしは臼井吉見の『安曇野』で、凄まじいまでの母子相克の光景を読んでいたし、またシズエが相馬邸から身を引かされた経緯も知っていたから、この人はさぞ良を恨んでいるだろうと思つていた。そ

れなのに、あれから六十年たつてなお、自分や夫に辛くあたつた人を「奥さま」と呼んで懐かしんでいる。わたしは改めて相馬黒光という女性の不思議を思うのだった。」つていうふうなことを宇佐美さんは、シズエさんのことを感じています。

穂高東中学校のブロンズ像、坑夫であります。三日ほど前の市民タイムスに、この坑夫、雨に打たれていたんで書いていました。この坑夫を武井さんと東中の美術部の生徒さんで、一生懸命磨いている様子が紹介されてきました。このブロンズ像の経緯はその後ろ側に銅板があります。像の裏面には「昭和廿九年四月 相馬黒光」と刻まれています。「坑夫は明治四十年萩原守衛が滞仏中の作品で我國に近代彫刻の道を拓いた不滅の傑作である／この度作者の守衛の郷里に学舎が設けられたのを祝つて」つていうことです。これが昭和二十九年になります。良は、翌年の三月二十日に亡くなつていられるわけです。先ほど武井さんが碌山館の《女》の鑄造のことについても、この像の話もしてくれましたが、家庭人としての黒光、良の姿を小説の『安曇野』を通して、話をさせていただきました。あとシズエさんがそれでも、奥様つていうふうに言わせた、そんなところを自分も課題として持ちながら、最後に、皆さんと意見交換できれば嬉しいなというふうに思つております。どうもありがとうございます。

相馬黒光に学ぶ女子大生のキャリア教育

■はじめに

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました澤田裕美と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

これから「相馬黒光に学ぶ女子大生のキャリア教育」と題して、お話をさせていただきます。本日は時間が限られておりますので、三つの流れに



澤田裕美氏

沿つてお話を致します。まず一つ目は、今の若者を取り巻く環境について、二つ目は大学で行われているキャリア教育について、三つ目はこの十年間に大妻女子大学で取り組んできた老舗企業と連携した授業についてお伝えします。

■今の若者を取り巻く環境

まず、次世代を取り巻く環境に関するキーワードです。第四次産業革命、ダイバーシティ、高校から大学への接続、そして日本が一二〇位前後を行き来しているジェンダーギャップ指数などがあります。日本人女性には管理職を目指すどころか、結婚や出産、子育て、介護などのライフイベントを経て、定年まで勤め続けることは容易ではありません。そして、十年後の大学偏差値も保証されない現況です。インターネットや生成AIなどのデジタル環境で生まれ育つた世代が、大学へ進学してなにを学ぶべきか、翻せば、大学はなにを教えるべきかが問われています。

一つの興味深い知見があります。二〇二三年、ハーバード大学が八十四年にわたる史上最長の研究結果が書籍化されました。「予測のつかない時代に、幸せな人生を送るために必要なものは何ですか？」という問いに対し、結論は「良好な人間関係」との結果でした。絆と良好な人と繋がりというのは、まさに相馬黒光さんの生き方ではないでしょうか。

■大学で行うキャリア教育

キャリア教育とは、特定の学問や職業に固有のコンピタンスを養う専門教育や職業教育とは異なり、また一般の教養教育とも異なります。学問と社会とを繋ぐ、より一般的で汎用性のある能力を養うことであると

私は認識しています。人生百年時代といわれる長い人生において、さまざまな課題、しかも正解のない課題に対処して行くための能力が求められています。経済産業省は二〇〇六年以来、「社会人基礎力」をいう概念を提唱し推奨しています。私自身は航空会社などで実務経験を積んで参りましたが、会社の名前ではなく、自分の名前で仕事ができる、生きていくことができる女性にまずはなつて欲しいと願ひ、そのための人材育成、いわゆるキャリア教育の実践と研究に注力しています。

■老舗企業と連携する理由

二〇一五年春以来、私は大妻女子大学でキャリア教育に携わつて参りましたが、その中で実践して参りました試みのひとつに、老舗企業と連携した授業がございます。

二〇一六年度のパートナーは、皇室御用達のハンドバッグメーカーである傳濱野(でんはまの)さん(一八八〇年創業)でした。それを皮切りに、二〇一七年度、一八年度は洋菓子のコロパンさん(一九一五年創業)。一昨年百周年を迎えた皇室御用達の洋菓子メーカーです。二〇一九年度は京料理を提供する、たん熊北店(きたみせ)さん(一九二八年創業)。コロナ禍の二〇二〇年度にはキッコーマンさん(一九一七年創業)。二〇二一年度は埼玉県川越市に本社があるスーパーマーケットのヤオコーさん(一八九〇年創業)。そして二〇二二年度に新宿中村屋さん(一九〇一年創業)。二〇二三年度には信州の蕎麦文化を受け継ぐ更科堀井さん(一七八九年)。直近の二〇二四年度には東京都文京区でホテル宴会業を営む椿山荘さん(一八七八年創業)と続きました。

女子大生のキャリア教育にお力添えいただき、パートナー企業を選ぶにあたっては、二つの拘りが私にはありました。

一点目は創業百年を超える老舗企業であることです。老舗企業が持つ

特性として、長年培った信用・信頼、仕入先や得意先などのステークホルダーとの繋がり、それを支える勤勉さ、陰徳、おもてなしなどの経営知識、そして人的資本(従業員)などがあります。

帝国データバンク(一九〇〇年創業)が二〇〇九年に発行した書籍『百年続く企業の条件 老舗は変化を恐れない』によると、一九一二年以前に創業した老舗企業八一四社に「大事なことを漢字一字で表現する」というアンケート調査を行ったところ、「信」(信用・信頼)、「誠」(誠実・誠意)、「継」(継承・継続)、「心」(真心・良心)、「真」(真摯・真理)などの回答が多かったようです。また、「創業以来のピンチをどのように乗り越えたか」という問いに対して、「商売を『運』で片付けてはいけないが、『徳』があったのだと思う」などの回答が目をついたと解説しています。

学生達には、そんな老舗企業との交流を通して、人から信用・信頼される、徳のある存在はいかなるものか、またそこで働く人たちの気遣いはどんなものか、その気風に触れて欲しいと期待しました。

パートナー企業の選定で拘った二点目は、ものづくりに携わっていることです。ものづくりをしている企業は、創業以来大切にしてきた社会に対する価値、換言すればその企業の存在価値を問い続け、それを目に見える形として商品などに具現化して来ており、女子大生にも理解しやすいからです。これを学生達に直に触れて欲しいと願ひました。

学生達がどのような過程を経て、商品開発・販売を実現したのか、そしてどのように社会で求められる力を体得したのかについて、次にお話をさせて頂きます。

■二〇一六年度 日本橋三越本店からの学び

まず、日本橋三越本店さん(一六七三年創業)との取り組みをご紹介します

します。

一九〇四年に呉服店から百貨店へと業態を変え、日本初の百貨店としてイノベーションを続け、小売業界を牽引する老舗企業のひとつです。三越日本橋本店さんでは顧客のあらゆる相談事に対応する「ストアコンシェルジュ」を多数配置されていますが、学生達とともに日本橋三越店を訪問し、「女将」と呼ばれている



近藤紀代子さんをはじめ、若手の「ストアコンシェルジュ」から直接心の籠ったまごころの精神を学ぶ機会を設けました。日本橋で働く異業種の方々との繋がりを大事にする働き方に、学生達は感動をされていました。また、呉服売り場では日本ならではの商品、帯や草履などが製作される過程などを学び、ものづくりの真髄に触れました。長く愛用する和服だからこそ、「お客様とともに人生を重ねる」働き方の醍醐味をご担当者から学びました。

■二〇二一年度 ヤオコーからの学び

次に、ヤオコーさんの取り組みをご紹介します。

関東圏で一八七店舗（二〇二四年四月現在）を運営し、経営利益二二五億円、食品スーパー業界ではトップの実績を持つ老舗企業です。ヤオコーさんの前身は埼玉県の北部にある青果店、八百幸（やおこう）商店でした。東京都港区の青山の紀ノ國屋（一九一〇年創業）が、戦後に高級果物店からスーパーマーケットへ業態転換し、一九五三年にセルフサービス方式（顧客が商品を手に取り、レジで一括清算する方式）を導入しましたが、その僅か五年後の一九五八年に、ヤオコーさんもセルフ方式を導入しています。女性経営者であった川野トモさんは「変わってはいけないこと」とともに「変わらなければならない」を強く意識され、

特に顧客目線に徹底した商品展開、売り場づくり、感謝の気持ちを表す接客にこだわり、そのこだわりは現在の店舗運営でも継承されています。学生達とともに川越市の本社近くの店舗を訪問しましたが、その際も、学生等は現場から驚くほどの熱量を体感していました。

■二〇二一年度 新宿中村屋からの学び、課題は「次世代のキャリアの提案」

いよいよ本日の本題です。JR新宿駅西口駅前の新宿中村屋ビル、その地下二階にあるレストラン&カフェMama（マンナ）が、学生達が学んだ舞台です。中村屋のロングセラーなどを提供するレストラン部門で、ロイヤリティが高いお得意様が多く訪れるお店です。新規顧客開拓を図る為の一品として、「新たなキャリア」を提案すること、メニューの概要（どんなコンセプトの新商品か）の他に、ターゲット（どのような顧客を想定しているか）、販売価格、原材料の仕入れ、店舗内でのオペレーション（顧客に対してどのように宣伝し注文を取るか）などを提案することを課題として頂いたのです。

授業が開講されて早々、石崎料理長（当時）に教室へ来て頂き、ボース氏や二宮健総料理長（当時）を経て今日まで伝わる「純印度式カレー」の歴史とその極意を講義頂きました。特に学生達が感銘を受けたのは、原材料への徹底した拘りで、例えば契約農家で飼育した鶏肉や自家製ヨーグルトを「純印度式カレー」に使用、また第二次世界大戦以来栽培が途絶えていた最高級のコメ「白目米」を復活させたことでした。



講義終了後には、中村屋さんのご厚意で学生達はグループごとに新宿の中村屋本カーリーを食べに行きました。まずは、JRをはじめ都営地下

鉄や東京メトロなどの駅と店舗との繋ぐ地下道の利便性を実感するとともに、周囲の街区を散策し、その立地や競合店の存在などの調査を行いました。次に学生達は昼食時や夕食時に店舗に入ります。彼女らが一応に目にしたのは壁に表記された待ち時間。空席待ちの行列に驚きました。常連と思われる客層は五十代から八十代の高齢者。次々訪れる顧客は杖やキャスターを携え、行列は絶えることはありません。常連客はメニューも見ず、お気に入りの定番メニューを注文しています。ホールスタッフが空席待ちの顧客へ気を配り、座席へ案内、メニューを紹介、「純印度式カレー」の入ったポットやチャツネ（調味料）などを配膳、精算、片付けなど、顧客の些細な表情の変化も見逃さず応対している姿を観察しました。店内の雰囲気は学生達は圧倒され、課題の難しさに気付きました。



学生達は中村屋さんで創作された「クリームパン」や「中華まん」に親しみを覚えていましたが、教室内で聞いた言葉が彼女らのアンテナにひっかかっていたようでした。それは、「現在まで変わらない美味しさを提供し続けるために、明治時代から中村屋は変えずに変わる努力をし続けている」「作り手の思いをカリーの味に込める」「ピンチをチャンスに変えようと捉え、その時その時、精いっぱい努力し、現在の創業二〇年続く中村屋がある」といった言葉です。学生達のノートには中村屋さんの社員さんから聞き出した言葉がしっかりと記録され残っています。さらに、中村屋さんの別の路面店へ足を運ぶと、社員さんとの繋がりで、二十年三十年とご最真に買ひ求めてくださる企業などのお客さんがあることを学生達は直接聞きました。創業者の相馬黒光氏がまるで今も健在のように、その息吹を感じ取りました。中村屋さんのメニューにポ

ルシチや中華料理があること、カーリースの量の多さなど、黒光氏が全て人のご縁から生まれたアイデアであることを学生達は知りました。教室の机の上で企業分析をするだけでは気づかない、創業者の思いやご夫婦が生涯を通じて大切にしたい信条や哲学に触れることで、学生達の職業観は変化を始めます。実社会に出てから目にする売上高や経常利益などの経営指標や、金利や失業率などの経済指標だけではなく、その数字の裏にあるもの、人の心や思いというのは現場に行かなければわからないことに、デジタル環境で生まれ育った世代が初めて実感できるのです。

■最終プレゼン発表会

二〇二二年九月から始まった授業は、翌年一月に最終発表会を迎えます。学生達はチームに分かれ、提案へ向けて冬休みも自宅で試作を重ね、仲間と意見交換は続けました。年が明け、授業が再開すると、空き時間を利用してプレゼンテーションの練習に励みます。当初は「このくらいできれば十分」と控えめな目標設定も、練習を重ねるにつれモチベーションが引き上がり、自身の成長の可能性を信じるような姿勢に変わって行きます。最終的には、スライドのデザインやアニメーション、スピーチの言葉や間の取り方など、一つ一つ丁寧に確認を重ねて行きました。

■提案に終わらず、実際に新メニューとして販売

二〇二三年六月中旬、中村屋さんの由緒ある「恋と革命のインドカレーの日」の直後の十日間、学生達の提案が実際に商品化され、店頭で期間限定メニューとして提供されることとなりました。Manna（マンナ）の厨房では原材料の仕入れが進み、ホールでは店舗内でのオペレ

シヨンが想定され、本社広報部ではポスター制作などが入念に検討されました。私はその間、中村屋の皆さんの打合せに参加させて頂き、同時にその準備状況を学生達にフィードバックし続けました。いろいろな社員の皆さんが学生達の声を汲み取り、二宮総料理長や関係部局のご理解が得られるよう奔走していただきました。その甲斐もあり、高校時代に美術部部长を務めた学生の一人が描いたイラストが、新メニューを提供する際にテーブルに敷かれるランチオンマットに採用されました。

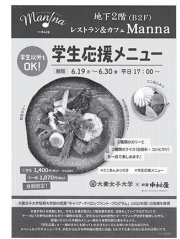
発売開始にともない、日本経済新聞で報道され、また大妻女子大学ではメールマガジン配信や学内のポスター掲示などがなされました。現役学生の晴れ舞台を応援しようと、既に社会人となった元教え子や、かつてご協力して下さった老舗企業の方々が連日来店してくださり、感想や励ましのお手紙やメールを頂きました。改めて人と人との繋がりが、この授業を支えてくださっていると実感し、感謝の念に堪えません。

■受講後のリフレクション

当時作製したランチオンマットやポスターを眺めると、授業終了時に寄せられた学生達の言葉が蘇ってきます。

・「長く愛され続ける「純印度式カレー」、その背景には壮大な歴史と受け継がれてきた味やこだわり、いつも目の前のお客様を大切する心構えがあることを学びました。そして自分達の提案が商品化され、お店で食べた時には喜びと特別な思いを感じました。」

・「相手に伝わるプレゼンテーションを実現する為、スライドのデザイン、文字の大きさ、実際に投影した色味、間の取り方、話し方等、細かな心遣いまで必要なことを学びました。常にお客様のことを考えて



受講生の学生が描いたイラストをランチオンマットに採用

働くこと、追求し続けることの大切さを経験しました。」

・「提案するからには確かな根拠が必要であり、今回の経験を通じてメニュー開発にこれ程多くの人が携わることを痛感しました。」

・「老舗企業への提案を通して、人と人との繋がりが自分の努力次第でいくらでも人生を変えることができることを経験出来、今後の生活で活かしたい。」

・「女子だけの空間でリーダーや意見を正直に伝えることができたので、社会でも臆することなく、意見を言えるようになりたい。」

・「この授業を通じて、自分の努力次第で限界はいくらでも変えられること、自信を持つて取り組むことの大切さ、自信がなければ一〇〇%になるように準備することの大切さを経験しました。この経験は必ず社会で活かしたい。」

そして、中村屋さんの斎藤正樹広報・CSR部長(当時)から頂いた言葉も思い出します。「自社の存在価値を見直すきっかけになった。何よりも若い社員が楽しそうに準備をして、勉強の機会になった」。

思い返せば、十年間、大妻女子大学のキャリア教育にお力添えくださった老舗企業の皆さんから、同じような言葉を頂戴しました。

本日はこのような貴重な機会を頂き、またご清聴くださり、感謝しております。ありがとうございました。